

馬を殺したからす

小川未明

青空文庫

北きたの海うみの方ほうにすんでいたかもめは、ふとして思おもいたつて南みなみの方ほうへと飛とんできました。途とちゆう中ちゆうでにぎやかな街まちが下したの方ほうにあるのを見みました。そこにはおほりがあつて、水みづがなみなみと青あおく、あふれるばかりでありましたから、しばらくそこへ下おりて暮くらしました。

この街まちは、この国くにの一番ばんの都みやこでありまして、人々ひとびとはそのほりの中なかにすんでいる魚うおを捕とることができなく、また下おりている鳥とりを撃うつことができないおきてでありましたから、かもめには、このうえなく都つごう合ごうがよく、暮くらしいところでありました。

ほりの中なかにいる魚うおは、それは北きたの海うみにいる魚うおの味あじとは較くらべもの

になりません。どろ臭くさくて骨ほねが堅かうございましたけれど、容易よういに捕とることができましたので、荒波あらなみの上うへで、仕事しごとするように骨ほねをおらなくてすんだのであります。

かもめは、もうずっと南みなみの方ほうへいくという考かんがえは捨すててしましました。だいいち、人間にんげんというものが、ここにいても、すしも怖おそろしくありませんので、水みづもそのわりあいに暖あたかであるし、その年としの冬ふゆは、この街まちの中なかで暮くらそうと考かんがえました。

かもめは、さまざまな街まちのにぎやかな光景こうけいや、できごとなどを見守みまもりました。そして、こんなおもしろいところがこの世界せかいにあるということ、ほかの鳥とりらはまだ知しらないだろう。よく、よく、この有あり様さまを記憶きおくしておいて、彼かれらに教おしえてやらなければな

らないなどと空想くうそうしました。

寒い冬さむふゆが過ぎて、春はるになると、ほりばたの柳やなぎが芽めをふきました。

そして、桜さくらの花はなが美しく咲さきました。このころが、都みやこもいちばん

にぎやかな時分じぶんとみえて、去年きよねんの秋あき以来見みなかつた景気けいきでござ

いました。

うかうかとしているうちに、春はるも過ぎてしましました。子供こどもら

がそれでも隠かくれてこのほりにときどき釣つりなどにやってくる夏なつと

なりました。いままで、かもめはなんの不足ふそくもなく、また考かんがえる

こともなく暮くらしてきましたが、このころからようやく考かんがえはじ

めました。それは、ほりの水みづの中にすんでいたかもめは、ふたた

び青あおい、青あおい、海うみが恋こいしくなつたからです。風かぜが強つよく吹ふいて、波なみ

が岩角^{いわかど}に白く^{しろ}、雪^{ゆき}となつてはね上^あがり、地平線^{ちへいせん}が黒く^{くろ}うねうねとして見える海^{うみ}が恋しく^{こい}なりましました。

かもめは、北^{きた}の方^{ほう}の故郷^{こきやう}に帰ろうと心にきめました。そして、その名残^{なごり}にこの街^{まち}の中^{なか}の光景^{こうけい}をできるだけよく見ておこうと思^{おも}いました。ある太陽^{たいよう}の輝^{かがや}く、よく晴れた日^ひの午前^{ごぜん}のことでありましました。白^{しろ}いかもめは、都^{みやこ}の空^{そら}を一まわりいたしました。すると、大きな木^きのこんもりとした社^{やしろ}の境内^{けいだい}を下^{した}にながめました。子供^{こども}らが豆^{まめ}を買^かつて、地面^{じめん}の上^{うへ}に群^{むら}がっているはとに投げ^なやっています。

かもめはそれを見^みると、まったく驚^{おどろ}きました。都^{みやこ}というところ
は不思議^{ふしぎ}なところだ。ここにさえいれば、遊^{あそ}んでいても暮^くらして

いくことができるのだ思おもいました。

ついに、このかもめは、北きたをさして長い旅ながたびに上りました。彼かれは、
 去年きよねんきた時じ分のことなどを思おもい出だしていろいろの感かん慨がいにふけ
 りました。高こう山さんを一つ越こえて、もうやがて向むこうに海うみが見みえよ
 うとするころでありました。かもめは、一羽わのからすに出であいま
 した。

からすはカーカーとなきながら、やはり里さとの方ほうをさして飛とんで
 ゆくところでありました。おしやべりのからすはすぐ、自じ分ぶんの上うえ
 を飛とんでゆくかもめを見みつけて、声こえをかけずにいられませんでし
 た。

「かもめさん、かもめさん、たいへんにお疲つかれのようなだが、どこ

へいつておいでになりました。」と、からすは問といました。

すると、かもめは、急いそぐ翼つばさをゆるくして、からすとしばらくの間道あいみち連れになりました。

「私わたしは二、三日にちまへ前に、ずっと南みなみの都みやこから出しゅつ立たつしました。去きよ年ねの冬ふゆはにぎやかな都みやこで送りおくました。もう夏なつになつて、北きたの海うみが恋こいしくなつたので帰かえるところですよ。」と、かもめは答こたえましました。

「それは、いいことをなさいましたね。私わたしなどは、いつもこんなさびしい田舎いなかにばかり日ひを暮くらしています。いつになつたら、そんなところへいつてみられるかわかりません。」と、からすは歎なげ息いきいたしました。

「なんのいけないことがあるもんですか、あなたの心こころがけですよ。いくにち 幾日も、いくにち 幾日も、みなみ 南をさしてゆけば、しぜんにいかれますよ。」と、かもめはいいました。

「たとえば、そこへいつても、どうして食たべていけるかわかりません。石いしを投なげつけられたり、みんなに目めの敵かたきにされていじめられるばかりです。」と、からすは身の不運ふうんを歎なげきました。

かもめは、都みやこでは、はとがみんなにかわいがられて、子供こどもらから豆まめをもらって、平和へいわにその日ひを遊あそび暮くらしていることを話はなしました。

「どうしてほかの鳥とりは、みんなそう幸こう福ふくなのでしょう。」と、からすはうらやみました。

するとかもめは、からすをなぐさめて、いいますのには、

「からすさん、私の見たはとの中には、ちようどあなたのように、いろまつくろみの色の真つ黒く見えるのがありましたよ。だから、あなたも知らぬ顔かおをして、その仲間なかまい入りをしていられたら、だれも不思議ふしぎに思うものはありますまい。ひとつ都みやこにいつて、大胆だいたんにそうなさつてはいかがですか。」と、かもめはいいました。

「そうですか、ひとつ考かんがえてみましょう。」と、からすは答こたえませんでした。

やがて、かもめとからすとは、別わかれてしまいました。かもめは海うみの方ほうにゆき、からすは里さとの方ほうにゆきました。かもめは、いつしか、昔むかしと同じ生せい活かつをしましたけれど、からすは里さとへいつても、

あまりおもしろいことはありませんでした。いつか、かもめから
 聞いたことを思い出して、

「都へいって、はとの仲間入りをすれば、なにもせんで楽に暮ら
 していける。」と、考えましたので、ついにその氣になつて、南
 に向かつて旅立つことにいたしました。

からすは、かもめのように空を高く、また速く飛ぶことはでき
 ませんでした。それでも幾日かかかつて、にぎやかな都に到
 着いたしました。

「なるほど、にぎやかなきれいなところだ。いつも、お祭り騒ぎ
 をしているとところだ。」と、思いました。

からすは、さつそく、社の境内へ飛んでゆきました。すると

いままで、見慣れない鳥が近くにやってきたので、気の弱いとは、一時に騒ぎたてました。からすは、これは困ったと思いました。見るとかもめのいったように、黒っぽい色のはともいました。これはだんだん彼らに馴れていかなければならぬと、初めは離れたところで、からすは地面に降りて餌を探していました。

しかし、いくら同じように黒っぽくても、からすとはとは、ちよつと見てもよくわかります。子供らは、からすを見つけると、石を拾っていつせいに投げつけました。

いろいろのことを思つて、茫然としていましたからすは、不意に石が飛んできたので、びつくりして立ち上がりました。そして、木の枝に止まって下をながめると、子供らは、なお自分を

目^めがけて石^{いし}を投^なげるのであります。

からすはしかたなく、その社^{やしろ}の境^{けい}内^{だい}から逃^にげ出^だしました。けれど、どこへいっても、自分^{じぶん}を仲間^{なかも}に入^いれてくれるはとの群^むれはありませんでした。そして、人間^{にんげん}に見^みつけられると憎^{にく}まれ、また追^おわれました。ちょうどそのことは里^{さと}にいたときも同^{おな}じことです。むしろかえって、都^{みやこ}のほうがいっそうひどいように思^{おも}われました。

からすは、はとの仲間^{なかもい}入^いりすることは断^{だん}念^{ねん}しましたが、都^{みやこ}の空^{そら}は煙^{けむり}でいつも濁^{にご}っていて、それに、餌^えを探^{さが}すようなごみためがいたって少^{すく}ないので、そこにいる間^{あいだ}は餓^うえを忍^{しの}んでいなければなりませんでした。からすは、この都^{みやこ}がちつとも自分^{じぶん}にとって、い

いところではありませんでした。

「こんなことになるのも、みんなかもめのいったことを信じたからだ。」と、彼は、かもめをうらみました。

しかたなしにからすは、ふたたび、自分の産まれた里を指して帰つてゆきました。こんなことがあつてから、このからすは、ひとをおだてたり、うそをいつて困らせたりすることを喜ぶようになりしました。それもまったくかもめの言葉を信じて、とんだめにあつた復讐を他に向かつてしたのでございます。

ある日、からすは田の上や、圃の上を飛んで田舎路をきかかりますと、並木に牛がつかれていました。その体は黒と白の斑でありました。そして、脊に重い荷をしょっていました。これを

見ると、さつそく、からすはその木の枝に止まりました。そして、
下を見おろしながら、

「牛さん、牛さん、主人はどこへいった。」と聞きました。

牛は、穏やかな大きな目をみはって、遠方の日の光に照らされて暑そうな景色を見ていましたが、からすが頭の上でこう問いますと、

「俺の主人は、あちらの茶屋で昼寝をしているのだ。」と答えました。

これを聞くとからすは、

「なんて人間というやつは自分かつてなんだ。おまえさんなぞは、人間の幾倍となく力が強いじゃないか。なぜこんな綱な

んか断ち切つてしまつて、山の中へ逃げていかないのだね。山の中へ入りや、草もあるし、水もあるし、木の実もあるし、遊んでいて楽に暮らしてゆけるじゃないか。そして、獣物の王さまにならないともかぎらないじゃないか。」と、おだてました。

牛は黙つて、からすのいうことを聞いていましたが、なんとなくそれを信じることができませんでした。

「いったい、そんなことができるだろうか。」といいました。

「なんでできないことがあるものか、おまえさんたちは臆病なんだ。」と、からすはいいました。

「先祖代々から、まだそんな乱暴なことをしたものを聞かない。」と、牛は答えました。

「やればできたんだが、みなおまえさんのような弱虫ばかりだ

。」と、からすはいいました。

人のいい牛も、ついに腹を立てずにはいられませんでした。

「小さな癬に、なまいきをいうな。」と、上を向いて太い鼻息を吹きかけますと、からすはびつくりして、

「ばか、ばか。」と、悪口をいって逃げ去ってしまいました。

からすは、ついに牛をおだてそこないました。そして野や圍の上を飛んできますと、今度は一匹きの馬が並木につながれていました。その馬は脊の高い、まだ年若い赤毛の馬であります。からすはさつそく、その木のいちばん下の枝に止まりました。馬は、足もとの草を食べていました。

「お馬さん、お馬さん、あなたがほんとうにかけ出したら、どんなに疾はやいでしょうね。私わたしはあなたのようなりっぱなお馬さんうまが、こうして綱つなで縛しばられているのが不思議ふしぎでならないのですよ。なぜこんなところにまごまごして、朝あさから晩ばんまで重い荷おもをにしよわされていなければならいんですか。」と、からすがいいました。

「おまえはだれかと思おもつたらからすか、よく俺おれの足あしが疾はやいことを知しっているな。ほんとうにかけ出だしたら、どんなものでも追おいつけるものでない。けれど逃にげ出だしたって、いきどころがないじゃないか、それとも、どこかいいたところがあるというのか。」と、若い馬わかうまは問とい返かえしました。

「それはありますよ。だれも束縛そくばくするようなもののいない、そ

して、暗い夜というようなものもない、まったく自由で、一日明るい昼ばかりのよい国がありますよ。」

「それは、いったいどこだ。」

「それですか、西の紅い夕焼けのする国です。毎日、あなたはその方を見るでしょう。いつもその方を見ると、愉快にはなりませんか。」と、からすはいいました。

「愉快になるよ。俺は夕焼けの方を見るのが大好きだ。けれど、そんないい国があるなどとは知らなかった。おまえは、ほんとうにいつて見てきたのか。」

「私は、太陽の近くまでいつて見てきました。」と、からすはいいました。

「太陽たいようの近くちかへ？ 真紅まつかだろうな。しかしおまえは翼つばさがあるからゆける、俺おれには翼つばさがない。」と、馬うまは悲かなしそうに答こたえました。

「そのかわり、疾はやい脚あしがあるじやありませんか。どんなところで、あなたなら飛とび越こせないことはありません。」と、からすはいいました。

「たいていのところなら飛とび越こせるつもりだ。」と、馬うまは答こたえて、しばらく考かんがえていました。

からすは、今度こんどはうまくやったなど、高たかいところへ飛とんでいつて、じつと馬うまのすることを見みていました。すると、馬うまは不意ふいにはねだしました。そして脊中せなかに積つんであつた荷物にもつをみんな落おとして、綱つなを切り放はなつて、野のとなく林はやしとなくかけてゆきました。からすは、

馬うまがしまいにどうするか空そらを飛とんで従したがってゆきました。馬うまはついに林はやしや、野のや、おかを越こえて、海うみの辺ほとりに出でてしまいました。日はようやく暮くれかかって、海うみのあなたは紅あかく、夕焼ゆうやけがしていました。馬うまはじつとその方ほうを見て、あなたの国くににあこがれながらも、どうすることもできませんでした。

「やってみろ！ おまえならこの海うみを飛とび越こせるだろう。」と、このとき、空そらでからすがいいました。

馬うまは、ほんとうにそうかと思おもいました。そして、一ひと思おもいに海うみを飛とび越こそうとはね上あがりました。けれど、二間けんとは飛とべず、海うみの中なかに落おちて死しんでしまいました。これを見みたからすは、

「あほう、あほう。」といいながら、飛とんでいつてしまいました。

その年の暮れ、大雪が降って寒い晩に、からすは一つの厩を見つけて、その戸口にきて、うす暗い内をうかがい、一夜の宿を求めようと入りました。するとそこには白と黒のぶちの肥った牛がねていました。

「おまえは、いつかのからすじやないか。あのとき、おまえのおだてにのつて山の中へ入つてみる、この大雪に、どうして安らかにねることができるか。おまえのようなうそつきには、宿を貸してやることはできない。」と、牛は追いたてました。

からすは、大雪の中をあてもなく、そこから立ち去ったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 Ⅱ」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「おとぎの世界」

1919（大正8）年8月

※表題は底本では、「馬《うま》を殺《ころ》したからす」となっています。

※初出時の表題は「馬を殺した鳥」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

馬を殺したからす

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>